異文化交流実践と教育・研究の相互活性化
～授業報告～

国際教育交流センターアドバイジング部門
田　中　京　子

国際言語センター日本語・日本文化教育部門
浮　葉　正　親

Ⅰ．基礎セミナーＡ　（前期）

■「韓流ドラマから『パッチギ』までー日韓比較文化論のすすめ」（浮葉正親）

１．授業のねらい

日本人にとって，韓国は「似ている」ようでどこかが「違う」，ちょっと気になる国である。この授業では，日本人が韓国の社会や文化のどこに違和感を抱くのかを吟味し，韓国という＜鏡＞に映った日本人の自画像を議論していく。また，日本と韓国（朝鮮半島）との歴史的な深い関係についても理解を深め，日本を東アジア漢文化圏のなかに位置付ける，広い視野を獲得するのがこの授業のねらいである。

２．受講者及び講師

受講生は文系・理系５学部の１年生12名であり，３名が韓国人学生であった。TA は，国際言語文化研究科の金愍智さんにお願いした。また，講師として金栄大さんを迎え，朝鮮学校の教育について，また名古屋在住の写真家･安世鴻さんを迎え，「慰安婦」問題について講演をしてもらった。

３．授業内容・スケジュール

３－１　スケジュール

４／11　オリエンテーション
４／18　日本人と韓国人，どこが違うの？
４／25　激しい受験競争と母の祈り
５／２　現代に生きる儒教精神－韓国に嫁いだ日本人花嫁の葛藤
５／９　在日コリアンと日本社会
５／16　ドキュメンタリー「ウリナラ～愛知朝鮮中高級学校寄宿舎の１年」
５／23「朝鮮学校って，どんなところ？」（講師：金栄大氏）
５／30「慰安婦」問題の基礎知識
６／６　休講（名大祭）
６／13　写真家・安世鴻氏講演会
６／20　発表準備＜グループ分け＞
６／27　発表準備
７／４　発表準備
７／11　調べたことを発表する（1）
７／18　調べたことを発表する（2）

３－２　グループ発表のテーマ

グループ１：在日コリアンのアイデンティティについて
グループ２：朝鮮学校と授業料無償化除外問題
グループ３：竹島問題

４．評価

受講生の多くは，韓流の影響で特定の俳優や歌手，ドラマに対する知識はあるものの，隣国の人々の日常生活についてはほとんど何も知らない。そんな学生たちの関心を引きつけるために，前半はさまざまなビデオを見せながら授業を進めた。今年度は３名の韓国人留学生がいたので，ディスカッションが容易であった。

この授業のもう一つのねらいは在日コリアン問題に対して関心を持ってもらうことである。そのため，今年度も愛知朝鮮中高級学校の卒業生である金栄大さんを講師に迎え，朝鮮高校のカリキュラムや教材につい

て紹介していただき，豊明市にある愛知朝鮮中高級学校の公開授業に３名の学生が参加した。また，教養教育院のギャラリー「clas」で写真展を開催した安世鴻さんにも講演をお願いし，「慰安婦」問題について話していただいた。

後半のグループ活動については，昨年度の反省を活かし，テーマの選択の幅を狭めた結果，上記の三つのテーマで資料を集め，発表を行った。竹島問題については授業では直接扱っていないが，文学研究科の池内敏教授の協力を得て学習を深めることができた。

■「日本の伝統文化～多文化の視点から学び発信する」（田中京子）　Traditional Culture of Japan: Learn and Introduce from Multicultural Viewpoints

１．授業のねらい

日本の伝統文化として語られることが多い書道や舞踊，着物，折り紙などについて専門の講師と共に実習を通して学ぶ。日本の文化について多文化の視点から捉え直し，それを日本語や英語を使用して発信，紹介することができるようにする。

２．受講者及び講師

受講生は文系・理系４学部の１年生12名，（留学生４名，日本人学生８名）であった。TA は国際開発研究科博士前期課程２年の何紅星さんに，また留学生センターアドバイジング・カウンセリング部門相談員の柴垣さんにも毎回参加してもらい，合計15名で進めた。学生全員が全クラスに出席し，宿題もすべて提出した。

３．授業内容・スケジュール

1	４月11日	授業・参加者紹介 Introduction	Think about “Your Culture” and describe it in any way you wish.
2	４月18日	文化とは What is Culture? レポートの書き方 How to Write an Essay	
3	４月25日	ＴＡによる文化紹介 TA's Presentation about his Culture	Write a report on the presentation
4	５月２日	華道実習（クラス内で） Practice: Kado 八代流教授　岡田佳恵先生 Prof. Okada Kakei, Hachidai-ryu	Write a short essay about Kado
5	５月９日	華道話し合い Discussion: Kado	
6	５月16日	日本舞踊実習（第５体育館，公開）Practice: Buyo 瑞鳳流家元　瑞鳳豊依先生 Prof. Zuiho Toyoe, Zuiho-ryu	Write a short essay about Buyo
7	５月23日	日本舞踊話し合い Discussion: Buyo	
8	５月30日	書道実習（公開）Practice: Shodo 藤井書道教室　藤井尚美先生 Prof. Fujii Naomi, Fujii School	Write a short essay about Shodo
9	６月13日	書道話し合い Discussion: Shodo	
10	６月20日	折り紙実習（公開）Practice: Origami 折り紙国際交流　白ゆり会 Instructors of Shirayuri-kai	Write a short essay about Origami
11	６月27日	折り紙話し合い Discussion: Origami	
12	７月４日	グループ活動（発表準備） Preparation for Presentation in Group	
13	７月11日	グループ活動（発表準備） Preparation for Presentation in Group	
14	７月18日	発表 Presentation	
15	７月20日（土） 16:30-18:00？	まとめ Summary	授業回数調整日です。あけておいてください。 Please keep this day & time free.

別紙参照

最終レポート執筆　Final Paper

日本に馴染みのない大学生を対象に日本文化を紹介することを想定して，各自テーマをひとつ決めて，英語で論じる。参照した文献と自分の意見は明確に区別して書くこと。

Choose a topic from any aspects or fields of Japanese culture and write a paper supposing you will introduce it to university students who are not familiar with Japan. Remember to distinguish your opinion from what you find in books and articles.

４．評価

４－１　授業と公開実習の連携

今年度も日本文化に関するワークショップと連携講座とした（４年目。教養教育院および留学生支援事業経費から専門講師謝金を支出した。日本人も含めた学部生たちが，多国籍学生たちと共に実習を経験する，という，理想的な環境を持つことができた。

実習の後の授業では，各学生が調査したことを持ち

寄って考察・分析した。

４－２　英語による授業環境

最初に“World Englishes”の考え方を紹介し，学生たちには，持てる言語運用力を駆使して，場に合わせて助け合いながらコミュニケーションすることを促した。授業中は，一人の教師対学生という関係でなく，スタッフ３名も多様な英語で多様な考え方を分かち合うようにし，学生たちが間違いを恐れず発言できる環境作りを工夫した。学生たちの英語習得レベルはそれぞれ異なったが，コミュニケーションの中で活用する場を提供できた。また，隔週で英語のレポートを提出する必要があったため，よい訓練となった。

４－３　日本文化の考察

実習後の話し合いの中では，それぞれの芸能や芸術について各自が調べたことをグループ内で話し合い，その後グループごとに英語で発表した。日本で育った学生たちと，海外から来たばかりの学生たちが互いの視点から学ぶ機会ともなり，学生たちは強い興味を持って積極的に参加していた。

４－４　公開発表

学生12名が３つのグループに分かれ，日本の文化について調べ，考察したことを，20分ほどで英語で紹介した。ＴＡが司会を務め，授業外から３名の留学生が発表を聞きに来た。

発表テーマ：
- Japanese Culture Seen from Daily Life
- Japanese Spirit and Culture Seen from Yuru-chara
- Tourism Plan for Summer

聴衆から励ましの言葉や意見などを受けた。学生たちにとっては，実際に日本に来て間もない人の前で発表するという貴重な訓練の機会となった。

Ⅱ．教養科目「留学生と日本－異文化を通しての日本理解－」（代表：浮葉正親）

１．授業のねらい

外国人留学生と日本人学生が討論や協同作業を通じて，両者の日本に対する理解と相互の理解を深めることを目的とする。名古屋大学内およびこの地域で異なる文化を持つ人々が共に学び生きることの意味を考え直し，多文化共生のあり方を模索する。

２．受講者及び講師

学部生は22名。学部別内訳は，文学部１，教育学部12，法学部５，経済学部１，工学部１，農学部２であった。これに10月に渡日した日本語・日本文化研修生18名（インド３，ベトナム３，チリ２，インドネシア１，ブラジル１，中国１，ウクライナ１，チェコ１，韓国１，ニュージーランド１，セルビア１，ウズベキスタン１，キルギス１），短期交換留学生２名（韓国），日韓共同理工系留学生７名，計49名が受講した。

平成25（2013）年度は，浮葉正親（代表），高木ひとみ，田所真生子，渡部留美の４名がこの科目を担当した。また，岩城奈巳が１コマを担当した。授業内容と担当は以下のとおりである。

３．授業内容

３－１　スケジュール及び担当者

10／７　　オリエンテーション（1）（全員）
10／14　オリエンテーション（2）（全員）
10／21　留学生と日本社会（渡部）
10／28　異文化との出逢い（高木）
11／11　グループ活動について（浮葉，高木）
11／18　グループ発表準備（全員）＊
11／25　グループ発表準備（全員）
12／２　グループ発表と討論（全員）
12／９　グループ発表と討論（全員）
12／16　グループ発表と討論（全員）
12／24　グループ活動から学ぶ（田所），レポート提出について
１／20　留学経験から日本を考える（岩城）
１／27　まとめ
＊１コマ分（90分）グループによる自主学習を課した

３－２　グループ発表のテーマ

グループ１：営業時間
グループ２：ゴミに見る日本文化
グループ３：「かわいい」について
グループ４：温泉
グループ５：日本の交通

グループ６：ギャル・カルチャー
グループ７：日本人は写真好き？
グループ８：若者の恋愛傾向

４．評価

昨年に引き続き，グループ活動に対する評価を重視し，全体の40％（発表30％＋自己評価10％）とした。その他は，レポート30％，出席15％，クラス討論への参加度15％（10％は自己評価とした）である。グループ発表に対する評価は，五つの評価項目を作り，教員による評価を15％，他の学生による評価を15％とした。結果的には，どのグループも積極的に発表に取り組み，26～27％を獲得した。発表のなかにはインタビューやアンケートによる調査の結果をパワーポイントにまとめたグループも多く，全体に工夫が感じられた。レポートについては，レポートの採点基準や採点方法について再検討しなければならないと感じている。

以下は，最終日に学生たちが提出したアンケートの自由記述の抜粋である。

★日本人の視点から日本文化や日本の変ったところ，面白いところを見つけるのはなかなか難しいと感じた。だからこそ留学生が疑問に思っていることなどはとても新鮮に感じ，もっと聞いてみたいと思えた。今回の授業を通して，自分の国のことをもっと知りたいという気になった。

★日頃の大学生活で留学生と接する機会がほとんどない。自分は人見知りなので留学生と友達になることなど無理だと思っていた。しかし，この授業のグループワークでは「日本の文化事情」について調べるということだったので，ある程度積極的に取り組むことができた。まずは自分から動いてみて，その中で文化の違いなどに気をつけていかなければならないと思った。

★この授業を通して，日本人の学生たちと一緒に討論や発表をして，大変勉強になりました。グループ発表を通して，日本についてもっと詳しくなりましたし，メンバーといろいろ話したりして友達もできました。しかし，日本人の学生と友達になるのはやはり難しいと思います。なぜかというと，日本人の集団（団体）意識が強いと感じたからです。でも，この授業で日本人の親切さを深く感じました。この授業が終わっても，留学生と日本のつながりはこれからもずっと続いていくと思います。（留学生）

Ⅲ．大学院授業「異文化コミュニケーション論 a/b」：国際言語文化研究科　多元文化専攻メディアプロフェッショナルコース　（担当教員：田中京子）

2003年度に国際言語文化研究科日本言語文化専攻で開講した科目「異文化接触とコミュニケーション」を，現在は同研究科の国際多元文化専攻メディアプロフェッショナルコースで「異文化コミュニケーション論」として継続開講し，2010年度からは前期と後期に分けて開講している。今年度も異文化コミュニケーションの理論と実践を中心に，少人数セミナー形式の授業を進めた。

１．授業のねらい

母語や背景となる文化が異なる人たちが，意思疎通をはかりながら共に生活しようとする時，どんな創造や衝突があるか，どうしたら信頼関係を築けるか，文献購読や経験学習，討論を通して考え学ぶ。

討論の共通言語として主に英語を使用するが，様々な英語と共に，各自が持つ母語等も尊重する。様々な言語や文化背景を持つ人たちのコミュニケーションの特徴を実体験し，積極的で公平なコミュニケーションについて考察する。

２．参加者

a（前期）は10名，b（後期）は４名の学生と，TA および教員，内容によってはコース外の参加者の協力も得て，授業を進めた。後期は人数は少なかったものの，出身地域や言語背景，年齢が多様で，内容の深まりに繋がった。

TA は昨年度後期から継続で文学研究科のストラーム ステファンさんが担当した。TA は出席・宿題確認等の事務補助と共に，毎週打ち合わせを経て授業の一部を受け持ち，学生が提出するレポートにコメントし，最終レポート採点の補助もした。

３．授業内容

【前期】
(1) 文化とは
(2) 異文化コミュニケーションとは
(3) アイデンティティー
(4) 文化と国家
(5) 文化と教育

(6) 文化とグローバル化
(7) 組織における多文化

【後期】
(1) 異文化コミュニケーションにおける「文化」とは
(2) 日常生活における異文化コミュニケーション
(3) 職場における異文化コミュニケーション
(4) 宗教とコミュニケーション
(5) グローバリゼーションと世界化
(6) 異文化コミュニケーションの課題

前期は英語，日本語，中国語が，後期は日本語，英語，フランス語，スペイン語，アラビア語が使われ，発表スライドを複言語にしたり，メンバー間で通訳や説明をしたりして，共通理解がはかれるよう工夫した。また，初めての試みとして聴覚障がいを抱える人，年齢の高い人等が参加していることを想定した発表も行なった。学生も耳栓を利用したり，障がい者支援について詳しい教職員からアドバイスを得たりし，多文化についてより深く考えるきっかけとなった。

4．評価・課題

教員は国際交流関連業務や留学生相談の中で培われる異文化コミュニケーションに関する経験や知識を，個別教育（相談）だけでなく授業の中でも生かすべく，この授業にとり組んでいる。また反対方向に，この授業を個別教育に還元して相談活動を発展させることも意識している。個別教育と集団教育，教育と研究の接点として，それぞれの内容をさらに深めていきたい。

今年度は新たな試みも取り入れて，今後さらに重要になる障がい者と健常者との知的協働について考えることができた。今後も専門家の協力を得ながら，多文化コミュニケーションの大切な視点として深めていきたい。

本講座の最初の10年間は英語を主な使用言語としていたが，昨年度後期から，多言語の尊重をより強く意識したコミュニケーションへと重点を移しており，各自が持つ言語や文化を尊重しながら共通理解をはかるという課題を追及している。コミュニケーションの効率，自己肯定の意識，等も考慮する必要がある。

急速に変化する多文化世界の中で，今後も新たな時代の知見を取り入れ，国内外の教員・専門家たちと情報・意見交換をし，教育と研究の双方向の活性化をはかりたい。